言心先生の中国便り

文化との距離

友人達と富士山に行ってきた。医者の夫婦と経営者の友人、そして彼の中国からの友人四人、合わせて八人である。

経営者の友人のうち、一人は中国の地方テレビの健康番組の女性キャスターであった。

年始の休みということで、温泉が混んでいて、なかなか予約できず、医者夫婦は仕方なく個室がない温泉宿を予約した。

医者夫婦は、二十年前に日本へやってきて、女性キャスターとは初対面である。彼らは、今回彼女に会うのを非常に楽しみにして、色々な支度をしてきた。

例えば、日本文化の紹介資料、日本と中国の医療を比較する資料等々である。

しかし、後の展開は少し意外であった。中国から来た三人は、日本の歴史・文化に余りにも無関心で、目的はあくまで買い物であったのである。

彼らは日本のお土産に夢中になり、他の人を一時間も待たせた。我々は我慢して、不快な表情を出さないように努めた。

予約した温泉宿に入ると、女性キャスターは直ぐに苦い表情をして、「どうしてこんな温泉を予約したのか?」と文句を言った。医者夫婦は丁寧な言葉で「他の温泉は予約できなくて、この庶民的な温泉を利用することにより、日本の普通の人々の生活を良く理解できる」と理由を説明した。

食事の最中、女性の医者は、中国から来た三人の寝具を用意し、温泉に入る際の注意事項も説明していた。三人の客は、それに対し感謝の言葉すら述べなかった。

次の朝、彼女は三人の客に、もし興味があったら外の日本庭園を案内すると話した。女性キャスターは、機嫌の悪い表情をして、「ここは、とんでもない宿で、昨夜は全く眠れなかったし、行かない」と叫んだ。

東京へ帰る時、医者夫婦と車の中で話をした。奥さんは、二十数年間日本で生活しているため、中国人との付き合いは少なく、友人は、ほとんど礼儀正しく、言葉使いが丁寧な日本人である。今回の体験は、彼女にとって非常にショックであったらしく、中国に戻って老後の生活をする自信がなくなったということである。

筆者は「日本文化は古代中国文化に近いとよく言われている。我々は現在の中国文化からは遠ざかっているが、古代中国の文化には近づいているかも知れない。」と半分冗談で言った。